

井上逸兵のしましまにしまっしま!

いのうえいっぺい(社会言語学者)

アニメはアートか？

ものの本によると、アニメはアートか？という議論があるらしい。「ニュータイプ」の読者なら、もちろんアートだ！という人も多いかもしれないが、そんなことはどうだっていい、という人が大半なんじゃないかな。

僕もとりあえずどうでもいいことのように思う。アートだろうが何だろうが、とにかく楽しませてくれればいい。カッコよかったり、かわいかったり、ステキだったりすればそれでいいと思う。だいたいアートって何なんだ(「芸術」ともまた違うのか?)。それをわかりあっているければそういう議論もむなしなものになる。

ここでその議論に首をつっこむつもりはないけど、僕はことを仕事の材料にしているから、「ことばのアート」と比べてこのことを少し考えてみよう。

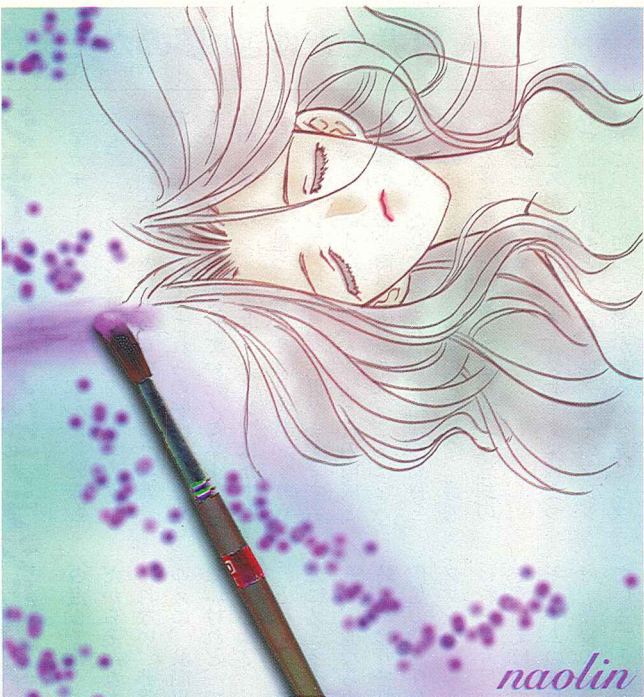
「ことばのアート」といえばまず思いつくのは詩だ。どうして人間は大昔から詩なんかかつくて喜んできたんだろう。楽しいことがあるに増えてしまった今では詩を楽しむ人の方が有意義でオタクっぽいかもしれないが、ものすごく昔から詩というアートはある。

それでその詩とアニメは結構似てるんじゃないか

ないかと思うのだ。一つは音やリズム。日本語の七五調もそうだし、欧米の詩なら似た音のことばを行末などにリズムミカルにそろえるというのがよくある。肉感的なよろこびを人に与える詩の働きだ。これはアニメにもある。音楽的にも、音的にも(声優の声も含めて)、映像的にも、つまり肉体的物理的に(理屈じやなく)訴えてくる。

もう一つに詩は僕たちに現実とは違う世界やふだんは気づかない世界を見せてくれるということがある。「人生は夢だ」という詩があるとしよう(かなりチンプな詩だけど)。その詩にふれて僕たちは「人の一生は放みたいなもんなんだ。出発点があつて、目的地があつて、途中で迷つたり、もどつたりすることもあるものなんだ。いつしよに道連れになつてくれる人がいたら楽しいんだ」というようなことに気づかされる。新しいものの見方を見せてくれる。

それは現実じゃないかもしれない。でもこのウソっぽい世界に僕たちは身をおいて快楽を得たり、はつとさせられたりする。たとえ現実ではなくても、すぐれたアートはそれ自体で完結した別の世界へ僕たちを連れていく。



illustrated by MIYATA NAOMI

アニメの悦楽もそういうところにあるんじゃないか。現実には絶対に起こりえないようなこともアニメなら違和感なくその世界に入っている。アニメは現実の写しではない。現実とまったく同じならはなからアニメなんていらぬ。実写でもいい。現実ではなく、しかもそれ自体で一つの世界になつているから、見ておもしろい。楽しい。感動する。ま、油絵の具で絵を描けばみなアートになるわけではないように、アニメがみなアートというわけじゃないけど、アートとは方法じゃなく、質しだいということになるのかな。